

かなはどうして教えたらいいか

小学校に進むまでには、かなも一通り読めるようにしてやる必要があります。今の小学校では、かなが一文字も読めないような状態で就学したら、一学期の学習は大変苦しいものになります。

昔の一年分の学習に当たるほどのものを、一学期くらいでやり終えるのですから。しかも、その学習時間は、昔の半分ほどに減っているというのに。

都市の幼稚園の調査によれば、卒園時にはほとんど全員が五十音を読めるようになっているそうです。このような実態を示している時に、かなの学習は小学校へ進んでから、などとのんびりしていると、子供が学校に適応できなくなってしまう恐れがあります。

かなは表意文字ですから、石井方式では、その本質にかなった使い方で、これを学習させます。

「お爺さんは、山へ柴刈りに行きました」のところで、

行^かないよ

行^きました

行^くこと

行^けばよい

行^{こう}よ

という変化を通じて、「かきくけこ」を学習させるのです。私は指導主事をしていた時、小学生が「行」は「い」という字だと言っているのを聞いて驚いたことがあります。そういう教え方をしている先生が多いのです。

「行」は「いく」という意味の漢字だ、と教えなくてはいけません。ただ、この言葉は、「牛」「馬」と違って、「いか」となったり「いき」となったりするので、変化する「かきくけこ」をつけ加えるのだ、ということを理解させるのです。

もし「行ないよ」とあつたら、「いかないよ」と読んで、絶対に「いないよ」などと読まないようにしなければいけません。今の中学生でも、「行ないよ」を「いないよ」と読む者がかなりあるのではないのでしょうか。

石井方式では、幼稚園でも「いないよ」と読む子は「いないよ」にさせています。